

鈴木 寛 社会の機能 としての スポーツ。

スポーツは、人間の生活に必要な不可欠なものではない。未来永劫、「衣食住」以上の存在にはならないだろう。しかし、世の中に存在した方が良いというのも事実である。スポーツは人間の精神的成長や協調性を育み、感動や興奮や悔恨や絶望や喜び……ありとあらゆる感情を内包する。「人間のふれあい」が希薄化した現代にあつては、確実に「世の中に必要な機能」と化しているのである。スポーツをこよなく愛する政治家・鈴木寛が、政治という仕事の現場の日常から感じ取った「スポーツの存在意義」を綴る。

第五回 Jリーグの優勝争いと 東京オリンピック

兵藤育子 一編成
Compilation by Ikuko Hiroda

鹿島VS浦和。Jリーグ優勝争いの感慨。

今季のJリーグ、鹿島アントラーズと浦和レッズの優勝争いは、私にとって感慨深いものがあった。以前私は通産省産業政策局で、Jリーグ発足を提案したスポーツ産業研究会に携わっていた。当時、Jリーグを立ち上げるにあたり、チームがあるべき姿として掲げられた条件が三つある。一つはサッカーのレベルが高いこと。二つ目は企業ではなく地域が主導して、地元の人たちが支えるチームであること。そして三つ目はサッカー専用スタジアムを持つこと。開幕時からこの三条件を満たすチームを理想のクラブとして、ひとつでも実現するように多くの関係者が奮闘した。当時、人気と強さを兼ね備えていたヴェルディ川崎

(現・東京ヴェルディ)が、理想のクラブの第一候補だった。しかし川崎は親会社・読売新聞による企業主導型の運営のため、第二条件を満たすことは困難だった。そこで、今度はサッカー王国・静岡県を本拠地とし、地域主導のチームで実力も伴っていた清水エスパルスと静岡県に第三の条件を満たしてもらおうべく、サッカー専用スタジアム建設の提案を持ちかけた。しかし、静岡県サイドに「サッカーだけを優遇できない」と断られてしまう。

このようななか、条件を満たす可能性の最も高いチームとして浮上してきたのが鹿島だった。鹿島の場合、地元が支えるチームという条件は難なくクリアしていた。実力については、我々通産省がブラジル政府に積極的に働きかけ、鹿島の前身であった住友金属に、後

に日本代表監督にもなったジーコの入団が決定。Jリーグ開幕以前、日本リーグ二部に留まっていた住友金属を強化する道筋ができた。サッカー専用スタジアムについては、当時、茨城県商工部長で、後に経済産業省事務次官となる北畑隆生さんが奔走し、実現にこぎ着けた。こうして開幕当時、鹿島はJリーグのコンセプトをすべて体現する唯一のモデルチームとなり、喜ばしいことにJリーグの初代王者にも輝いたのだ。

一方、浦和レッズは、本拠地・浦和がサッカー王国としての歴史が長いこともあって、地域に根づいてはいたが、チームの成績は低迷。J2落ちも経験した。熱狂的なサポーターを筆頭に、クラブの在り方としては理想的だっただけに、それが非常に残念だった。そんな浦和も二〇〇一年にアジア最大級のサッカー専用スタジアムである埼玉スタジアムが完成する頃から、メキメキと実力アップ。フロントの的確な強化策もあって、昨年アジア一の強豪クラブに変貌をとげた。

Jリーグの開幕から一四年の月日が流れ、最初に条件を満たした鹿島と、現在、最も満たしているといえる浦和が優勝を争い、鹿島が劇的な優勝を遂げ、天皇杯にも輝いた。発足時、理想に燃え、立ち上げをお手伝いした者としてはうれしい限りだ。同時に明確なコンセプトを掲げることの重要性も改めて実感した。

オリンピック招致の成否を握るものとは。

Jリーグの話を持ち出したのは、今年がオリンピッククイヤーであり、また二〇一六年の東京オリンピック誘致が話題になっているからである。というのも、Jリーグの教訓を踏まえて、私が草の根が支えることの大切さを、招致にあたって考える必要があると思っ